



Data

監督：馬志翔（マー・ジーシアン）
 脚本：魏徳聖（ウェイ・ダーション）、
 陳嘉蔚（チェン・チャウエイ）
 プロデューサー：魏徳聖（ウェイ・
 ダーション）、黄志明（ジミ
 ー・ファン）
 出演：永瀬正敏／大沢たかお／坂井
 真紀／伊川東吾／曹佑寧（ツ
 アオ・ヨウニン）／張弘邑（チ
 ヤン・ホンイー）／陳勁宏（チ
 ェン・ジンホン）／鐘硯誠（ジ
 ヨン・ヤンチェン）

👁️👁️ みどころ

1930年の反日暴動を描いた『セデック・バレ』2部作（11年）の台湾人スタッフが、甲子園に旋風を巻き起こした1931年の嘉義農林学校（KANO）の実話を映画化！同じ時代に、全く正反対のこんな歴史があったとは！

映画は芸術！政治宣伝の道具にあらず！そのことをしっかり確認したうえで、①1969年の三沢高校VS松山商業、②1979年の箕島高校VS星稜高校の名勝負にも比肩する、感動的な1931年の嘉農VS中京商業の決勝戦を見守りたい。

もっとも、八田與一の描き方はあまりに親日的！そんな声があがった時の反論の準備もしっかりと・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 3人の台湾人スタッフに注目！ ■□■

台湾では、2014年11月29日の統一地方選挙で国民党が大敗したことを受けて、馬英九（マー・インチウ）総統は直後の12月3日に国民党主席を辞任、2015年1月17日に朱立倫（チュー・リーレン）が国民党主席に就任した。これは、馬英九の親中国寄りの姿勢が批判されたためと分析されている。このことから明らかなように、近時、中国が力をつけてきたことに反比例して、台湾の国際的な政治的・経済的地位の低下が目立っているが、それは映画界も同じだ。

そんな中、魏徳聖（ウェイ・ダーション）監督の『海角七号／君想う、国境の南（海角七號）』（08年）（『シネマルーム34』405頁参照）が台湾で大ヒットするとともに、台湾の日本への「反日度」、「親日度」が注目された。それを監督・脚本したのが魏徳聖だ

が、彼が続けて作った『セデック・バレ』2部作(11年)は、日本統治下の1930年に起きた抗日暴動「霧社事件」を題材にしたものだったから、これはある意味で、反日度の強い映画として日本では賛否両論が巻き起こった。本作を劇場用映画として初監督したのは、その『セデック・バレ』で台湾原住民の頭目タイモ・ワリス役を演じた馬志翔(マー・ジーシアン)というから、すごい。そして、魏徳聖は本作ではプロデューサーと脚本に回っている。また、本作のプロデューサーは、『海角七号/君想う、国境の南』と『セデック・バレ』と同じ、黄志明(ジミー・ファン)だ。

本作は、2014年2月27日から台湾全島で劇場公開されて大ヒットを続け、第51回台湾金馬獎で観客賞と国際映画批評家連盟賞を受賞し、作品賞、主演男優賞(永瀬正敏)、新人監督賞等6部門にノミネートされた。それを受けて『キネマ旬報』2月下旬号は『KANON 1931海の向こうの甲子園』の特集を組み、魏徳聖と馬志翔の対談を掲載している。パンフレットには魏徳聖と馬志翔のインタビューもあるので、それらを参考にしながら、本作に見る3人の台湾人スタッフに注目!

■□■昨夏の台湾旅行の話題から、一躍日本でも大ブームに!■□■

私は2014年8月17日から21日まで、4泊5日の日程で台湾へのツアー旅行に出かけた。バスで台湾東部を回る旅ははじめてだったが、そこでガイドさんと盛り上がったのが、台湾で上映中だった本作の話。弁護士兼映画評論家の私が、日本では未だ公開されていない本作のことをよく知っていることにガイドさんは驚いていたが、その時の話題がそっくりそのまま今、日本の新聞紙上で踊っている。

その1つは、1月28日付大阪日日新聞。そこでは、「夏の大会描いた映画ヒット」「台湾観光客 甲子園へ」という見出しで、「兵庫県西宮市の甲子園球場内にある甲子園歴史館を多くの台湾人観光客が訪れている」ことが報道された。これは、今年が夏の全国中学校優勝野球大会(全国高校選手権大会の前身)の第1回大会から100年の節目にあたり、日本野球の歴史にとって大きな意味があるためだ。さらに、大阪日日新聞は、2月3日付「刻む記憶-4-台湾」として、2014年12月8日、台湾の西南部、嘉義市にある嘉義大学で、チームの監督・近藤兵太郎と「最後の語り部」だった中堅手の蘇正生の2人の功績をたたえる彫像の除幕式が行われたことを伝えた。そこではさらに、本作でも印象的に描かれていた嘉義駅前方にある中央噴水池に立つ、「麒麟児」と称された呉明捷の銅像が新たな街のシンボルになっていることが、写真とともに伝えられた。

さらに、今年は『バンクーバーの朝日』(14年)(『シネマルーム33』207頁参照)や『アゲイン 28年目の甲子園』(14年)など、話題性の高い野球映画の上映が重なっているが、それも何かの縁だろう。

■□■原住民、漢人、日本人の混成チームの長所は?■□■

日本ハムファイターズの陽岱鋼選手が台湾出身だということはよく知られているが、より正確に言えば、彼はアミ族という少数民族の出身。彼は走・攻・守の能力を兼ね備えた一流選手だが、とりわけ優れているのが走。原住民たる高砂族やアミ族などの走力が優れているのは『セデ



◎ 果子電影

ック・バレ』を見れば明らかだ。日本統治時代の台湾では、台湾人（漢人）、原住民、日本人が混在していた。ちなみに、侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督の名作『悲情城市（悲情城市/A CITY OF SADNESS）』（89年）は、1947年に起きた「二・二八事件」を題材にしたもの（『シネマルーム17』350頁参照）だが、この時代の台湾は、本省人（台湾人）と外省人（在台中国人）の対立が顕著だった。

本作では、近藤兵太郎（永瀬正敏）監督が率いて、日本の甲子園球場までやってきた嘉義農林学校（嘉農）野球部のメンバーに対して、ある日本人の新聞記者が投げかけた混成チームへの罵声ともいえる言葉が逆に大きなテーマになる。台湾大会でも各校は台湾人を中心としたチーム編成だったから、混成チームを編成した嘉義農林学校は珍しかったらしい。しかし、近藤監督が目をつけたのは、①打撃力のある台湾人（漢人）、②足の速い台湾原住民、③守備に長けている日本人、というそれぞれの民族が持つ長所。それを生かした3民族混成チームは、近藤にとって理想的なチームだったわけだ。しかし、レギュラー9人のうち、漢民族2人、先住民4人、日本人3人で構成された嘉農の野球チームの実力は？

■□■ 近藤監督の出身校は？松山出身者の心意気は？ ■□■

私と同じ愛媛県松山市の出身で最も有名な人物は、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』の主人公とされた秋山好古、真之の兄弟と正岡子規の3人。他方、正岡子規がこよなく愛したスポーツが野球で、アメリカから輸入されてきたこのスポーツを「野球（のぼーる）」と名付けたのは彼だ。

そんな縁（？）もあり、松山は昔から野球が強く、中でも松山商業高校は、本作の決勝

戦で嘉農と対決した中京商業などと並ぶ有名な強豪校だ。私が選ぶ高校野球の名勝負ベスト3は、①1969年の北奥羽代表・三沢高校VS北四国代表・松山商業、②1979年の和歌山県代表・箕島高等学校VS石川代表・星稜高校、③1998年の東神奈川代表・横浜高校VS南大阪代表・PL学園の3つ。①の松山商業の井上投手と三沢高校の太田投手の投げ合いで始まった決勝戦は18回でケリがつかず、翌日の再試合に持ち込まれたが、その試合を大学1回生の夏休みで帰省していた私は、テレビで手に汗を握りながら見つめていた。

『戦争と一人の女』（12年）（『シネマルーム30』199頁参照）では、戦争末期の東京で「どうせ日本は負けてなくなってしまう」「どうせ男の8割と女の2割、日本人の半分が死ぬ」と語る、坂口安吾を彷彿とさせる、ニヒリズム感いっぱい「文士」役を演じた永瀬正敏が、本作ではその松山商業から派遣されて嘉農野球部の監督になった近藤兵太郎役を演じている。

私は高校を卒業した18歳の時に松山を離れてから既に50年近くになるが、本作を観て、近藤のような松山出身者がいたことを誇りに思った。私と同じ松山出身の近藤を演じた永瀬正敏が、日本人としてはじめて第51回台湾金馬奨主演男優賞にノミネートされたことに心から拍手を送りたい。

■□■八田與一の描き方の賛否は？■□■

昨夏の台湾旅行では、ガイドさんが積極的に台湾の農業に寄与した日本人技師・八田與一の話詳しくしてくれた。しかし、八田與一の名前を知っている日本人観光客が少なかったのは意外でもあり、残念でもあった。むしろ、八田與一のことは日本人よりも台湾の人たちの方がよく知っているのかもしれない。本作のサブタイトルとなっている1931年という年は、日本の甲子園球場では本作が描いたような熱狂に沸いたが、満州では満州事変が勃発した年だ。

本作で八田與一（大沢たかお）が登場するシーンは少ないが、彼は一大灌漑プロジェクト「嘉南大圳（かなんたいしゅう）」を完成させたことによって、台湾の農業に大きく貢献した日本人技師として高く評価されている。『セデック・バレ』を監督した魏徳聖や、同作で台湾原住民の頭目タイモ・ワリス役を演じた馬志翔が、本作で八田與一をそんな風に描いてくれたのは一種の驚きだが、さてその賛否は？

映画は政治的主張の道具ではなく、あくまで芸術作品だが、時にはそこにさまざまな政治的思惑が働くことがある。ちなみに、ハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリーが初監督を務めた映画『アンブロークン』（14年）が、戦後70年にあたる今年1月30日から中国で公開されている。これは、第2次世界大戦中に旧日本軍の捕虜となり、約2年間の収容所生活を送った米国の元陸上五輪選手、ルイス・ザンペリーニ氏の生涯を、実話をもとに描いた作品だが、そこでは旧日本軍の残虐性が描かれているため、製作側の意図を

離れて反日感情が高まる可能性が指摘されている。そのことを2月3日付読売新聞は大々的に報じた。アンジェリーナ・ジョリー監督はそんな動きに対して、「これは反日的な映画ではない。許しの物語だ」と語っているが、さて・・・？

それと同じように、本作における八田與一の描き方を見れば、「あまりに親日的だ」との批判が出てくる可能性もあるが、その場合それをどのように考えればいいのか・・・？

■□■手に汗握る決勝戦を、実況中継でじっくりと！■□■

元NHKのアナウンサーで、1987年に日本人初の全米スポーツキャスター協会賞の特別賞を受賞し、殿堂入りした羽佐間正雄氏は私の大先輩だが、同時に親しいカラオケ仲間であり、その他の分野でも遊び仲間・・・？その羽佐間氏の、オリンピック実況中継11回という記録は誰にも破られないはずだ。1931年当時にテレビはないから、野球の実況中継はラジオ。本作にみる1回戦、2回戦のラジオでの実況中継ぶりや、嘉農が勝ち進むにつれて盛り上がっていく新聞記者たちの取材ぶりは面白い。

嘉農VS中京商業の決勝戦を実況中継したのは、1回戦からずっと同じアナウンサーだが、その実況中継は1969年の三沢高校VS松山商業の決勝戦をテレビで実況中継した羽佐間氏と同じように、臨場感いっぱい面白い。しかも、アナウンサーにしてみれば、当然テレビよりラジオの方がしゃべり甲斐があるはずだ。本作は3時間05分の長尺だが、甲子園での試合風景はその実況中継を軸として進んでいくのでそれに注目！三沢高校VS松山商業の引き分け再試合は、疲労が目立つ太田が初回に2点本塁打を打たれたのに対し、松山商業は疲れのある井上を休ませて中村を救援させ、松山商業が優勝した。嘉農と中京商業の決勝戦は当然、嘉農のエース・呉明捷（曹佑寧（ツァオ・ヨウニン））と中京商業のエースが激突。互いに譲らぬ力投で三振の山を築いていたが、試合中盤から右足のユニホームにこびりつく呉明捷の右手の血を最初に発見したのは、実況中継していたアナウンサーだ。果たして、この状態で呉明捷はエースとしての投球を続けることができるのか？

以降、私を含む多くの映画の観客は、甲子園球場の座席に座っている観客と全く同じ気持ちで呉明捷投手の一挙手一投足を、固唾を呑みながら見守るはず。嘉農VS中京商業の決勝戦の結果は、4対0で中京商業の勝ち。嘉農は惜しくも準決勝に終わった。これは歴史上の事実だが、映画は芸術。前述した高校野球の名勝負ベスト3は「筋書きのないドラマ」が最大の魅力だったが、本作がスクリーン上に描き出すドラマは筋書きが見えている。しかし、それでも大きな感動を呼ぶはず。それが映画の良さというものだ。老いも若きも、男も女も、時代を越えて、1931年の甲子園球場の観客として、この「筋書きのあるドラマ」を心ゆくまで堪能したい。

2015（平成27）年2月4日記